

『学会開催報告』

日本放射線安全管理学会 第7回学術大会

大会長 学際科学実験センター 森 厚文

日本放射線安全管理学会第7回学術大会は12月3日(水)から5日(金)の3日間、金沢歌劇座の大集会室、第3・4会議室、展示室などで開催されました。本大会の主催は日本放射線安全管理学会であり、日本保健物理学会と金沢大学学際科学実験センターの共催、金沢大学十全医学会の後援のもとに、一般講演(口頭発表、ポスター発表)、招待講演、特別講演、シンポジウム、パネルディスカッション、学会賞受賞講演、特別企画セッション、ランチョンセミナーなどが行われました。

招待講演として、米国エール大学のテリコ教授による「Radiation protection dosimetry issues in therapeutic radiology」、ロシアのウラル工科大学副学長のコルトフ教授による「Ionizing radiation detectors based on single crystals and nanostructured ceramics of anion-defective aluminum oxide」の2講演が行われました。最近の放射線治療の進歩に伴い、高精度にがん病巣のみに放射線を集中させることが可能となります。その結果、障害軽減と同時に治療成績の改善が可能となり、がん治療における放射線治療の役割が増大してきています。一方、最近の技術進歩は患者の被ばく防護の観点より新たな課題を生じており、テリコ教授は種々の放射線治療法による被ばく評価法の相違とその問題点について言及され、標準的な被ばく評価法の確立が重要と考えられました(写真1)。

特別講演として東京大学大学院工学系研究科の中尾政之教授による「失敗の予防学一人はなぜ似た失敗を繰り返すのか」、金沢工業大学高度材料科学研究センター所長の南戸秀仁教授による「匂いセンサーシステムの開発とその応用」、文部科学省原子力安全課放射線規制室長の中矢隆夫氏による「放射性同位元素等の規制に係る最近の動向」の3講演が行なわれました。中尾教授は、テレビ番組の「世界一受けたい授業」に2回出演されたように、軽妙な語り口で多くの事例を紹介しながら「人はなぜ似た失敗を繰り返すのか。でも人間だから仕方がない。失敗したら正直に申告するのが一番である。正直に申告してくれたら防止策は自動的に決まる。再発防止のために失敗知識を供することで世のためになる」と工学倫理として「正直申告」の重要性を強調されました。医学倫理・医療倫理は工学倫理と必ずしも同じではないかもしれませんが、失敗に関しては共通だと考えられます。

シンポジウム「放射線の光と陰—その正しい理解に向けて—」では、4名のシンポジストにより放射線知識の普及について何が重要かについて討論が行なわれました。現在、放射線や放射能は先端科学技術から医療までの広い範囲に亘って利用され、現代社会に欠くことのできないものとなっています。しかし、社会的には危険なもの、やっかいなもの、という否定的なイメージが強く、バランスのとれた放射線利用を阻害する要因となることが懸念されます。背景に被爆国としての国民感情があることは否定できませんが、一方で放射線に限らずグローバルな科学離れ傾向とリンクしていることも指摘され、科学技術全般に関わる国民的な問題としての認識も必要です。その意味でも学校及び一般人教育を通じて放射線知識ひいては科学的物の見方を普及させることは重要な課題であると考えられます。教



写真1



写真2

育、医療、報道に携わっている4名のシンポジストから、放射線との関わりで日常経験される現状と問題点、対応、特に理解を深めるための工夫や今後に向けた提案等の紹介があり、会員からの意見を交えて討論を行い、問題点の整理と方針を見出すことができました。

ランチョンセミナーでは、本学医薬保健研究域の絹谷清剛教授による「放射性医薬品内照射療法って何?—治療内容とその放射線管理—」と題して講演が行われました。核医学診療の大部分はPET/SPECTによる診断が占めていますが、最近放射性医薬品による内照射療法が注目されています。現在国内で施行されている内照射療法は、1) ^{131}I による甲状腺がん・甲状腺機能亢進症治療、2) ^{131}I -MIBGによる悪性褐色種・神経芽腫治療、3) ^{90}Y 標識抗体による悪性リンパ種治療、4) ^{90}Sr による悪性腫瘍骨転移疼痛除去療法の4つです。絹谷教授は放射性医薬品による内照射療法について症例を供覧しながら分かりやすくその有用性と安全性について講演され、内照射療法の今後の普及・発展が大いに期待されました。

一般講演として、口頭発表47演題、ポスター発表55演題が発表され(写真2)、その中から4名に優秀プレゼンテーション賞4名、3名に優秀ポスター賞が授与されました。本大会には、約300名の参加(3日間で延べ約750名)があり、熱心な議論がなされ実りの多い大会となりました。関係者の皆さん(医薬保健研究域、理工研究域、学際科学実験センターの教職員)には、心より深謝申し上げます。